

大津市の中学生自殺事件を受けていじめ問題について考えること

馬場 弘教

1, 本意見書を書くに至った動機と、書きたい内容について

自殺にまで進展した今回の事件のマスコミ報道に接するたびに、大きな怒りがこみ上げてくる。多くの人はいじめの残酷さ非道さもさることながら、イジメ事件に対してなにもできない・しなかった校長などの現場管理職をはじめ、教育委員会、教育長、クラス担任、そして学校の職員集団に対して大きな怒りを感じたのでないかと思う。

42年間の学校現場を経験した私には、大津市の教育関係者がした行動等が手に取るように分かる。責任逃れのいろいろごまかしの言動をしているが、腹立たしさを通り超えて激しい憤りを覚える。これが筆無精な私にこの意見書を書かせる動機になった。

現在わたしは退職しているので教育行政とは直接的な利害関係はない。思っていること感じていることを何も恐れず遠慮なく言わせてもらいたい。少々内部告発的になる部分もあるが、現場経験者の視点から意見を述べなければならない責任が有るようにも感じて本意見書を書いている。

自殺に追い込まれた彼は何に絶望したのだろうかと考えることがある。彼にとっては直接的ないじめの残酷さは想像を絶するものがあつたに違いない。しかしそれ以上に、彼を守るべき担任を始めとする学校関係者がなにもしなかったことや、傍観していて彼になにも援助できなかった周りの生徒達・・・このように誰も助けてくれる人がいなかった。これが絶望感を強めて生きる力を失って行ったのでないかと推理する。父親は学校関係者から見殺しされたようとも言っていたが、その通りだと私も感じる。問題解決に無力な学校に大きな怒りを覚えた。この意見書はなぜにここまで学校組織が無力なのかについて述べたい。

数カ月前になるが交通事故で瀕死の状態の子供のそばにいた通行人等が誰一人として助けようとしなかった中国の実情が報道されたことがあった。今回の事件では、いじめの現場を目撃した人またその情報を知り得た人は生徒以外の教職員などの関係者の中にも少なからずいた。今回の事件は報道された中国の実情とすごく共通点のあることに気づく。関係者が見て見ぬふりをするのは、これは学校に限らず世間一般の大人社会にも蔓延している。しかし今回は逃げてはならない直接の関係者が逃げたのだから話にならない。事件の原因の分析・解決策を考えるに当たっては、学校現場にも見られたこの「関われば損をする」ことにも触れなければならないと思う。

非行的な問題の発生の防止策としての日頃の指導の充実も大事ではあるが、人間性豊かな人格の育成を目指した、より広範な視点からの指導の充実が求められる。つまり人間教育（私は人権・平和・文化を希求し、他者（自然や環境も含める）と共存共栄を目指す人の育成と定義する）を充実させなければならない。学校現場のいじめ・人権に係る教育の現状にも触れ、今後

の指導のあり方について意見を述べたい。

事件の真相解明がなされれば責任の所在が明確になる。教育行政側としてはこれを避け曖昧にしたいであろう。でも今回の事件を今後に活かすためには真相の解明は避けて通れない。再発防止策は真相解明がなされた後の問題である。今回の事件は教育関係機関（組織と人）が全く機能してなかったところに原因がある。この点を詳細に分析して対策を考えなければならない。組織が機能しなかったという反省に立てば、教育行政機関が機能するような対策にならなければ有効な再発防止策とはならない。これについても意見を述べたい。

2, いじめはいつ、どこで、誰があうかわからない。

いじめの定義はいろいろなされているが、私は個人あるいは集団で、自分より弱い立場にあるものに対して、一方的に肉体的・精神的な攻撃を継続的に加えて相手に苦痛を与え、あるいは相手の立場を弱くし相対的に優位な立場になることを目的とするものであると定義したい。一見弱い立場の者が強いと思われるものに対しても、より強い立場の者をつるんだり、あるいは匿名性を利用してインターネットで攻撃したりすることもあり、力関係とは関係ないこともある。

ところで子供（高校生まで）の間でのいじめの態様は様々である。30年～40年前では使い走り金銭強要・・・などあった。これらは学園もののマンガ・アニメがヒントになったようだ。多くの人の前でいじめをするというデモンストレーション的な要素はそれほどには顕著でなかった。葬式ごっこはかなり以前（1985年）の鹿川くん事件の時に私は初めて知った。自殺の練習は今回初めて聞いた。これらは外見的にはゲーム的な装いをしている。そして傍観者であるクラス生徒の前でやるなどの特徴がある。いまはネットの時代だから、いじめについての情報の発信や受信もインターネットを使ったものも多いようだ。

いじめは広義的には人権に関連するものの全般において、特定の個人や集団に対して苦痛を与えるものとも言える。昨今話題になっているいじめは、これより狭い意味で俗に言ういじめである。これらいじめは誰がいつどこでどんないじめにあうかわからないなどと言われている。

いじめの被害に合う人になにか特徴的なものがあるかといえれば必ずしもそうとはいえない。あえて言えば他と違う差異があるものがターゲットになりやすいようだ。その差異も他人より劣っている場合もあれば、優れている場合もあり優劣での差異ではない。優れたものを持っているものがターゲットになることも多い。性格的なものではないじめを受けるものに多少の傾向性がみられるようだ。いずれにしても〇〇〇過ぎる人がいじめの対象になりやすい傾向はある。いじめは日本だけにあるのではなく、どこの国にもいじめがあるようだが、日本人は外国の人より差異を気にする傾向が強いと言われているから、他の国々とは違う日本的いじめがあるのかもしれない。

本稿では職場におけるいじめ・パワハラやマスコミやインターネットを使った誹謗中傷などについては触れず、高校生までの年齢期の俗にいうところのいじめを念頭において述べる。

3、いじめにより心身に深刻な被害もたらす。人権上の問題である。

ちょっとしたからかい・悪口・冷やかしの一過性であり軽いものは日常に見られ気にするほどではない。しかし心に傷を残すものは許容限度を超えている。これは人格・人権無視の卑劣な行為であり人道上許されない行為であることをまず共通認識しなければならない。中にはリンチによる殺人やいじめで自殺にまで追い込むケースや、怪我を負わせるものなど深刻なものがある。ここまで深刻なものは犯罪行為だと言える。成人した大人ではいじめに対して軽く受ける術を身に付けていたりしてある程度耐性ができているが、心身の発達段階の子供のいじめは社会問題として、どうしても解決しなければならない重要課題である。

肉体的攻撃は低年齢の幼児・児童の場合に多く見られ、表面に現れ易いのでその状況の把握が比較的容易である。年齢が上がるにつれ中・高生では精神的な攻撃が増え表面に現れないことが多くなる。いじめで苦痛を受けていてもそのことを小・中・高生の時期は、恥ずかしく親にも先生にも知られたくない心理もあり相談という形で上がるケースは少ない。いじめられている本人からは相談するところもなく、いじめが継続されればその悩み苦しみは日増しに増大して行く。

幸いにしていじめによる被害が深刻化する前に、事実が判明しても問題を解決し調整する教師は、いじめられる側にも責任の一端があるのだと思いがちな傾向がある。イジメをする者は正当化する理由を一方で常に用意しているものである。全容の把握のために加害者側の言い分も聞くことをしなければならないとしても、その言い分をわずかでも認める事をしてはならない。指導に当たる教師の中にはケンカと同様な見方をして、双方に非のあることを指摘し、喧嘩両成敗的に処理しようとするケースも多く見られる。これによりいじめを受けている者は二重の苦痛を味わうことになる。

いじめを受けている者の深刻な苦しみは、多くの場合第三者は軽く考えがちである。問題を発見しあるいは相談を受けそれを解決し調整する教師・保護者は、被害者の立場で考え心情を十分に理解するように努め、注意深くかつ慎重に対応しなければならない。対応を誤ると被害者からの相談や情報も途絶えてくる。いじめはますます陰湿になりエスカレートし被害が継続されていく。ついには極限に達するほど深刻化していくと、重大な人権上の事件として突如として自殺や傷害事件として表に出ることがある。

いかなる理由があっても苦痛を与えるという基本的人権を侵してよい理由は全くない。この立場を貫かなければならない。これこそが人権文化

(<http://cache.yahooofs.jp/search/cache?c=ygkdzFlw3pgJ&p=%E4%BA%BA%E6%A8%A9%E6%96%87%E5%8C%96%E3%81%A8%E3%81%AF&u=www.hyogo-jinken.or.jp>)

p%2Fkenkyu%2Fqanda.html) の出発点であり、帰着点であると思う。

4, いじめには、心が育たないあるいは壊れていく時代背景や、過重なストレス下に身を置かなければならない社会全体の歪の影響がある。

子供の中には、いじめなどの残酷な事もヘッチャラに出来る者がいる。心が育ってないというか、あるいは心がない・壊れていると思われる者を見かける。心の教育は家庭がメインだが、それを育てる環境が良くない。大人社会の反映とくに政治家の無責任な言動や企業などの不祥事ニュースの影響、マスコミや週刊誌などの低俗番組・記事の氾濫、表現の自由を逸脱するネット情報、アニメ・マンガ・ゲームなど視聴率販売利益を上げることが一切に優先する利益至上主義。社会全体に悪影響を及ぼし、大人の心まで変えた角栄流の金権主義、自分の利益だけを貪る政官の癒着システム、民主党政権下で顕著に目立ち始めた生き残りだけを考える政局主義、大衆迎合のポピュリズムの氾濫・・・震災時に日本人はステタものではないと思った絆の一時流行だが、がれき処理ではエゴイズムが（これも政治家の日和見からくるものでポピュリズムの変形と思う）顕著に目立つ。このような社会現象が目につく。他人をかばっては生き残れない、自分のことは自分で守らなくてはという考えが近年ますます強くなって来ているように思う。

こういう社会風潮は大人でも考え方や行動さらには人格までも影響を受ける。ましてや心身の成長期の子供の受ける影響には大きいものがあるのではないかと思う。

5, いじめの発見はそれほど困難ではない。でも得られたいじめに関する情報の扱いは高度な教育的配慮のもと慎重でなければならない

中学生・高校生の教室で行われるいじめは巧妙で、教師の発見は注意深く観察しないと見落としてしまうこともある。でも注意深く観察すれば見抜ける場合も少なくない。

いじめの情報はなかなか教師には届かない。子供の中には事実を報告することは告げ口（チクリ）であり良くないことをしているという価値観があるようで、当事者以外からの事実報告も皆無に近い。絶対悪と思われるいじめに対してもチクリだとして報告しないのは納得しがたいが、報告を受けるべき学校側や親が信用されていないから子供側には全く非はない。子供から保護者へ報告があってもそれを学校に上げることはほとんどしないのが現実だろう。いじめの加害者は底知れぬ不気味さ怖さを持っていることが多い。あとがどうなるかわからないという恐怖心が当事者やいじめの事実を知っている者からの情報が得られない理由でもある。

学校側が情報を入手してもその情報源を秘匿し、情報の提供者を報復などから守らなくてはならない。この面での信頼がないと情報は集まらない。いじめられているのが恥ずかしいから、あるいは心配をかけまいとするから親や教師に告げないというより、情報を提供したあとの解決方法なども含めて

情報の活用方法に不信感があるから、保護者・被害者や第3者からの情報が入りにくくなっているように思う。

そこでアンケートが活用される場面が生じる。アンケートの定期実施は抑止効果を主目的とし、いじめの早期発見にも有効である。アンケート項目の設定も大事だが、真実をありのままに書いてもらうには、その記載場所を含めて回収方法・活用（利用）方法にも工夫がいる。

アンケートでは真実は見えにくい時がある。書く方も工夫した書き方をしているので細心の注意で目を皿にして文章表現を深読みし、SOS シグナルを見落とさない注意力も必要である。いじめられている本人からの情報であっても第3者から、あるいは状況を心配した者から出たようにする。アンケート情報をヒントにして教師が自分の目で直接事実を探ることが最も大事である。突然教室に行くとか集団内の生徒の動きを注意深く観察すると発見できる。プロレスごっこは遊びのように見せかけたいじめである。発見されても遊びだとして言い逃れする。苦痛を感じていればそれはいじめである。嫌がっていないか十分に観察する必要がある。ゲーム的な装いをしているが本質はいじめである。

ところで学校でもいじめに対する教育がいろいろ計画実施されている。私は子供に連帯感、正義感を持たせる傍観者の教育が大事だとかねがね思っていた。第3者・静観者・傍観者はいじめの現場に遭遇している者のことであり、クラス内の生徒であることが多い。その者からの報告を期待したい。これは大変に勇気のいる行為だ。大人である教師自身が見て見ないふりをするのだから、その教師から傍観者から正義の声を発しさせる指導は実質困難なようにも見える。しかしこれはすごく大事なことであるのでそれを促す方法を考えなくてはならない。不正に対してそれを許さない正義の人を育てる行為だから、それのない教師からの指導には当然困難を伴う。今回の大津のケースでは、女子（性別などの情報を明かしてはいけない。配慮不足だ）生徒が泣きながらいじめの状況報告を電話でしたと聞いた。なんと素晴らしく勇気のある行為かと思った。報告を受けた教師がその正義の声を生かしきれなかったのだからこれほど残念なことではない。

今回のニュースの中でもこの生徒の行為に最も感動を覚えたが、一方報告を受けた学校教員や学校の対応のまずさに最も怒りを感じた。もちろん教育長や校長の記者会見にも怒り心頭に達する思いがした。この生徒は泣きながら報告したと聞いたが、この学校の職員集団にはこれほどまでも思いつめ、命がけにも似た懸命の訴えが必要だったのではないかと思うと余計に辛く残念な思いがする。この生徒になんと言って詫びるのだろうか。職を辞して詫びてもまだ足りない。私は感動の涙と怒りでこのニュース記事を見た。今後情報提供者が誰であるのかという犯人探しをさせてはならない。関係者はすべての方法を駆使してこの生徒を守らなくてはならない。

最近多くのいじめに見られるように今回のものも大勢の生徒の前で、時には先生たちも知り得る場所で繰り返し行われた。ゲーム的な外観を呈したデ

モンストレーション効果をも狙ったものだった。いじめられる側にすればその辛さは倍加していたのではないかと思う。

そういう人前での執拗ないじめを加害者が繰り返したが、その病的と思えるほどの行為の奥には加害者からの心の叫び（SOS信号の発信）などのメッセージ性があることを感じる。教育現場にいるものは加害者の行為からそれにいち早く気付く立場にいた。その心の闇に何があるのかを周囲の大人は早い段階から心に留めていかなければならなかったと思う。継続・エスカレートしていく前に組織的にかつ個別的にカウンセリングなどを通して加害者からのSOSの内容を理解し指導の手を差し伸べることができていたなら事件にはならなかったかもしれない。このように考えるとき、いじめた加害者も実は学校教育や家庭教育の被害者であると言える。

6, 学校現場だけの指導では対症療法的な域を出ない。抜本的な改革なしには成果は一時的・表面的でしかない。

私が以前勤務した学校では、いじめ対策委員会（数名で構成）があり、表面化したいじめへの対応や潜在的ないじめの発見のために定期的なアンケート調査の実施や、カウンセラー（教育相談担当職員）や人権・同和教育担当職員の配置できめ細かな相談業務や人権教育などを行っていた。比較的進んだ取り組みがなされていたようで、成果はそれなりに上がっていた。

いじめの問題は対人関係の問題でもある。近年いろいろなプログラムが用意・準備され、学級担任などが中心となった取り組みが行われている。対人スキルアップ、コミュニケーション能力のアップの教育、自尊感情を育てる教育、対人ストレス解消・感情コントロール、ソーシャルスキルトレーニングなどと呼ばれるものの導入が図られている。これらはいじめを起こさない予防的な教育としての効果も期待できる。私もこれらの中の幾つかを経験し有効であると感じた。これらを紹介しているサイトの例として

<http://www.nara-edu.ac.jp/CERT/April07/html/index.html>

<http://members.jcom.home.ne.jp/i-network/hituyou.htm>

<http://members.jcom.home.ne.jp/i-network/cap.htm> など多く見つかる。

これらのサイトから入っていけば関連の情報が次々にたくさん入手できる。これらのプログラムは、やり方次第ではかなりの成果が期待できそうだが、現場ではそれなりに取り組みがなされていて当然成果はあるはずだが目に見えてその成果が上がっているわけではない。

ところで、いじめを無くす教育の基本は人権教育だろうと思っている。しかし日本のこの分野の教育は同和教育一辺倒から抜け出せていない府県が多く大変に遅れている。道徳教育の充実でかなりの成果が期待できそうだが、道徳教育を受けなければならない先生たちが指導する道徳教育には限界があると言わざるをえない。人権や道徳などの指導は、教師の内面、生き方などの人格的な資質が問われるので教科の指導と違う難しさがある。教師自身が子供にとって良い生き方のモデルであれば、子供にとって最良の教育環境

となり、その先生と触れ合うだけで自然と良い感化を受け心の成長が出来るのではないかと思う。

いじめや同和問題などに代表される差別的攻撃には、情報操作による巧妙な仕掛けがある。仕掛けられた情報操作を見抜く力を個人や集団が持てば状況は一変するはずだ。そこで教育先進国ではメディアリテラシー教育の導入が進んでいる。私も人権教育・いじめ教育の最重要柱になるべきだと思っているが、日本の教育関係者にはそこまでの理解がなされていないのが実情だ。人権教育について現状はしっかりとした指導プログラムはなく、各指導者まかせになっているようだ。

私は現職時代に人権教育ではメディアリテラシーの教育（別稿の人権・同和教育で述べています）を、またいじめ教育では傍観者の教育が大事だと考えそれを中心に実施した。傍観者教育では、自殺した鹿川くんの遺書と、同じクラスにいた傍観者（級友）が成人したあとに後悔手記を書いているものを題材に使ったことがある。いじめの教育も人権の教育の視点を忘れては全く意味を成さない。

最近マスコミ等に登場している教育評論（家）で思い切った発言をしている方の中で、水谷修、尾木直樹、藤原和博に私は注目している。マスコミなどでの言動だから当然抑制がかかっているものとなっている。でも傾聴に値する言動と思った。

各氏は現教育システム（体制）批判を抑え気味にしての発言をしていた。そういう言動だからか、やはり体制内改革（対症療法）の域を出るものではない。そういうなかでも、現在の校長を総入れ替えしなければ本質的には問題解決はしないなどと藤原和博氏はTV報道の中で思い切った発言をしていた。この発言の前後の流れから、校長に現場を変える意欲や力量・識見がないからである。そういう人が管理職になっているから問題解決はできない（主旨）。などと言っていたようだ。この点において全く同感だ。

今回の大津中の事件における担任教師、管理職、教育委員会のこれまでして来たことや言動を見る限り、日本の教育行政システムの腐敗の根は深く、学校現場段階での対症療法的な指導でいじめの問題が好転するとは到底考えられない。本稿は、根本原因から解決策を考える立場をとっている。

7, 今回の事件でいじめの解決に機能しない教育現場の実情が世間を驚かせた。教育現場は管理強化だけ進んで、事なかれ主義が蔓延し機能していない。

今回の事件も、担任教師、校長、教育委員会などがいじめなどの教育の重要課題に対して機能していない実情を如実に表している。これは教員採用試験、管理職登用の問題、人事管理・・・等の教育行政システム上の問題が大きいと思う。津波で避難しなかった宮城県石巻市大川小学校、今回の大津中のいじめにより自殺問題まで進展したケースの根は共通している。

マネージメントを欠く管理のみが強化されていく教育現場の問題は一校だけの問題ではない。すべての学校に内在している文科行政の問題であり、

これによる弊害が大きく絡む。文科省や教育委員会などは、教育現場の改革を唱えてはいるが、現場は事なかれ主義の蔓延で決して本気で改革の推進をしようとしていない。教育改革を唱え本気で実践するものが、潰されていったのをこれまで教育現場で見てきた。改革をする意欲も・能力も持ち合わせていない者が自己保身の事なかれ主義で上り詰めた管理職の椅子なので、この人のもとで改革ができるはずがない。

現状の改革を進めれば現場には現状維持派（守旧派＝抵抗勢力）がいて波風が立つ。管理職は波風立てるより現場が平穏無事でうまく行っているように見せかけたいので、改革に対して管理職は後ろ向きになる。むしろ改革を妨害する傾向すら見えた。抵抗勢力のリーダーともなっていたものがいた。

日本的組織は行政機関のみならず、民間の大企業でも人事管理に大きな問題を抱えている（ゴーン氏）。上司は自分より無能な者、使いやすいもの、従順な者を部下にしたがる。保身の強い人、上司のことをハイハイと聞く人、柔順な人が上司から見て安心安全、使いやすい。一方、生徒思い、情熱のある先生、意見を持っている人、自分の考えを持っている人、深く考えることをする人、信念を持っている人・正義感があり、真実な人・誠実な人・・・は敬遠される。こういう人は事なかれ主義の現場では、出る杭となり打たれる。その結果管理職からは嫌われる。嫌われる先生は人事異動などで左遷され、あるいは冷や飯を食わされる。その結果理想の先生像の金八先生は実在しにくくなる。現場がいじめなどの教育課題解決に機能しないのは、事なかれ主義の蔓延に代表される組織運営の問題が大きな要因であると思う。

大津の中学校事件のようないじめはどこにでもあり得ると前述したが、この学校での事件が表面化した段階以降の取り組みには大きな疑問を持った。現教育システムのもとの管理職（教頭や主任層まで含んで）が機能しないのは十分に想像できるが、多くのヒラ職員の中に問題の解決を訴える人が一人もいなかったのだろうか。そこまで現場の先生が問題解決に無力だとは思いたくはない。このことは最近まで教育現場にいた私にも想像がおよばない。この点で大津中学校の職員集団には大きな疑問符をつけざるを得ない。私が勤務した学校では、表面化したイジメ事件や表面化する以前にキャッチできたいじめへの対応策は、学校が組織を上げて取り組み、それなりの成果をあげていた。その問題解決を議論する場では必ず一人以上は真っ向からいじめの被害者を守る意見を述べる者がいた。

8、子供のいじめ問題是对応が難しいので逃げ腰となっている。

子供社会だけの問題ではなくオトナの社会でもいじめの問題は深刻である。共存共栄でみんなが幸せになるより、自分だけがそうなりたいという競争の原理なのか、相手の不幸の上に幸せを築こうとする人間のサガなのか、昔も今もこれからも、いじめなどの問題の解決は容易ではないと思う。

心が育ちにくい環境下で形成された人格・人間性の矯正は大人でも子供で

も困難である。毅然とした対応や処罰等で見かけの効果があつたとしても、別なところでその歪が出る。人間の心・本質に関わる問題なので簡単なことではない。

学校のいじめ問題は教育の分野の問題であるが、その解決のためには学校・家庭・社会が機能しなくてはならない。そのためには緊密な連携が必要である。処理を少しでも間違ふと人権問題として責任が問われたり、こじれて問題の解決がより困難になることだってある。モンスターペアレントに怯えて縮こまっている状況もある。

いじめは保護者との連携が極めて大事だがそれは容易ではない。連携は真実を伝えることから始まるが、いじめっ子の保護者に集団内での子供の様子・事実を伝える事に、大変な困難を感じるものである。躊躇して親にとって大事な情報が伝わらないことも多くある。情報を伝える側受ける側に高度な教育的な配慮が必要であるが、受ける保護者側に大きな問題があることが多い。

いじめに対する教育は人権教育でもある。人権教育は人権感覚の乏しい教師（他人の人権を守るより自己保身を優先するので万事事なかれ主義にひと）では出来ない。生徒は鋭敏な感覚で偽物教師を見抜く。だから己の生き方とは矛盾する口先だけの指導では生徒は受け入れない。だからいじめに関する指導や人権に関する指導は、避ける傾向が出るのかもしれない。

これら諸々の厄介な事情があり、いじめの問題解決から避けて逃げようとする傾向が生まれているようだ。

9、なぜ教育関係者全員がいじめの事実を隠蔽しようとするのだろうか、

教育委員会は知事・市長、議会から監視・管理されその機嫌をうかがう。校長は委員会、主任は校長にヒラは主任にそれぞれ管理され、いじめ問題等が表に出ると責任を問われ、力量が問題視され、良くない評価を受ける。

いじめは問題として上がったケースでなく、発見した数が大事、最も大事なのは解決した件数で評価をすべきだ。イジメを事件としかどうかの線引きは困難である。もしいじめの発見した件数を報告する（多いほうを良しとして競わせる）のであれば、すごい数が上がるだろうと思う。なによりも大事なのは解決を目指してどのように取り組んだかであるが、現実的には表面的にうまく行っているように見せかけたい組織は、いじめの報告数は少ないほうが良いので、事件として扱った大きなもののみに限定して報告するようだ。

事件としては表面化していない、見えにくいいじめの発見をして、それを解決することなどは上司・管理職からは全く期待されてはいない。やむなく表面化した大きな事件のみが、いじめの件数となり報告される。それ以外は隠蔽してしまう。だから報告された数はほんの氷山の一角でしかない。

軽いいじめや嫌がらせ程度は、大人社会での深刻ないじめに耐える訓練的な要素がないわけではない。心の成長を阻害し、心に傷を残す深刻なものも

事件として表面化していなければ、数として把握されていない計数外となる。事件として把握された深刻な事例のみがやむなくカウントされ、あとはひた隠したい管理職によって、いじめの多くは隠蔽し報告されない。

管理職の態度がそうだから保身の教師はそれに合わせて、見て見ぬふりをする、避けて通る。単なるふざけ合い。遊びの延長だと見る。いじめや人権侵害があるようには見ない。結果的にこんな先生が良い評価を受ける。

いじめを発見すれば、解決までの処理が厄介になるし、管理職からは嫌がられ悪い評価を受ける。だから見て見ぬふりをするなどして避けて逃げるのが一番だという風潮が生まれることになる。

クラス内でいじめを発見してその解決を目指す取り組みをしても、その成否はともかくも、管理職からは決して良くは思われない。積極的に関われば損をするシステムだ。だからそこから目をそらし関わらないのが利口だと思うのだろう。

事なかれ主義がどの組織にも蔓延しているのはこの原理・理由によるのではないか。ストーカーやいじめなどでの被害届や相談を拒否し、消極的にしか対応しない警察の対応が時々話題になるが、これはどこに起因するのだろうか。ただ単に面倒くさいからだけの理由からだろうか。教育現場と同じ原理があるのだろうか。

教職員の仕事は、もともとチームで仕事をするより単独での指導の形態が圧倒的に多くの時間を占めている。先生たちは仲間で助け合うことはまずしないし、問題が起きてもチームで解決を図ることをしない傾向が強い。一人ひとりは常に孤独であり、大変弱い立場である。数値などの表面のみで評価される。管理職をはじめ同僚（部主任、教科主任、学年主任）からも保護者からも3重に4重に評価され数値として集計・報告され管理されているのが現状である。加点をねらうより、失点を避ける傾向が強くなる。伸び伸びとできなく息詰まるような雰囲気は現場にはある。現場は管理強化で他人・同僚は守ってくれないので自分で自分を守るしかないとの思いが、昔より顕著に目立つようになった。必然的に失点を無くすために担任の段階でまず隠蔽され、そしてあとの全ての段階で隠蔽が行われることとなる。

10、教師もいじめの被害者となることだってある。そこでいじめっ子を味方につけるといふ禁じ手を使う教師がいる。

教師は同僚からのいじめ・嫌がらせよりも、生徒との人間関係で悩むことがある。クラス経営や授業等で思うようにさせてくれない生徒の存在で、様々な形の妨害にあい悩むことがある。この子さえいなかったら授業もやりやすく、クラス経営もうまく行くのに・・・などと思うことがある。教師だって深刻ないじめのターゲットになる。

小学校の低学年から見られる荒れた教室の状況を学級崩壊などという言葉で言われることがある。生徒によりクラスの雰囲気が壊され学ぶ場でなくなってしまう学級が少なからずあるようだ。高校段階では授業の進行

を妨害する授業妨害がある。経験した学校の中で充実した授業は受けが悪く、暇つぶし的な内容のない授業が良い評価を受ける傾向が見られた。一時期、校内暴力という言葉を目にしたときがあった。これは生徒間でのいじめ・暴力および対教師暴力、器物損壊等の体制側（生徒から見れば教師や学校は体制側）に向けられたものの総称である。学級崩壊、授業妨害、校内暴力など今は一時期よりは減ったのか、話題となくなくなったのかもしれない。事件として表立ってはいないが依然として深刻であることだろう。

過激で危険な行動に出る者は、かつては 17 歳前後がピークだった時代があったが、いまは中 2 の 14 歳頃がピークで低年齢化している。歯止めのかからない危険な行為に走ることがある。学校は教育機関であるがため警察等の外部の諸機関との連携も時には必要になることがあっても一身にそれを受け、解決の力も後ろ盾もないまま、ひたすら抱え込むことを余儀なくされる。外部から見て指導が生ぬるいとか、もっと毅然とした態度で臨めとかの批判も出ようが、そんなことで片付けられるほど学級崩壊、校内暴力等の問題は簡単なことではない。

鹿川君の葬式ごっこでは教師自らが参加していじめに加担した。この教師は責任を取りその後依願退職したとネット情報で知った。今回の大津中のいじめのあった教室は教師も傍観者（後述）であり加害者となっていたようだ。教育現場にいた私にはこれは加害生徒への迎合であり、自己保身であるのがよく分かる。

マル秘であるべき職員会議の内容を生徒に漏らす同僚も私の経験した職場には過去にいた。荒れた学校では先生がいじめ（各種の妨害等のいやがらせ、校内暴力）に合わないための問題生徒への接し方の一つだ。自らそうしたというより脅迫を受けてそうせざるを得なかったのかもしれない。こうした生徒への迎合などは全くの間違いであり決して使うべきでないが現実起きていた。これは、教師はだれも助けてくれない孤独な存在であると前述したがこのことが原因の一つでもあると思う。

いじめっこはリーダーの要素があるので味方につけ間接的にクラスをまとめたいと、いじめっ子の力を借りることをする先生は、荒れた学校には結構いたように思う。いじめっこと真正面から対峙するなどして人間関係で失敗すると、クラス生徒全体からの嫌がらせやいじめに教師自身が遭うハメに陥る。そういうことで、リーダー的な子どもや問題ある生徒を味方にするとうまくいく。このような禁じ手と思われる手を使う同僚が結構いた。

いじめっ子を利用するという側面があれば教育的とはいえず、クラス内にその弊害が必ず生じてくる。その子のソンザイを認めてやり、成長の場を与えることが出来れば教育的であり望ましいことである。いじめのない、なんでも助け合える明るく楽しいクラスづくりに力を貸して欲しい旨の期待感を寄せ活躍の場を与えることは是非しなければならない。その子の持っている長所をクラス内で伸ばせる配慮をしなければならない。自分のソンザイを認めてくれる大人がいれば、いじめっこである問題児であっても良い方向に向

くことも十分に期待できる。教師の管理下で善導できればそれは望ましいことであり教育的でもある。

いじめっこは近年医学的に〇〇〇障害などと呼ばれる生来的・個性的な面も少なからずあるのかもしれない。こういう子供は人格・性格形成の段階において家庭内等において何らかの問題を抱えている事も多い。その子の味方になっていくこと無くして、その子の成長は困難である。問題児を理解し包容し教育的配慮で成長させることを念頭に置き、プロとしての力量を持って接していくことが何よりも大事である。

11, いじめの解決方法について

いじめに対して学校だけでは問題解決できない事件的なものは、現状下では当面警察などとの外部機関とも、積極的に連携をとっていくべきだろうと思う。これまでは関係機関は相談を受けても消極的対応でたらい回しする傾向も見られた。でも今回の件でそれはもう許されなくなっているものと思う。現体制の学校は十分な信頼を得ているとは思えないので、学校外の関係諸機関との連携・活用の場面が今後増えてくるのでないか。

インターネットで「いじめ 相談機関」で検索すると数多く機関が設置されているのが分かる。公的な機関をはじめ民間や市民団体等も多く窓口を設置して相談を受け、解決に手助けする用意ができているのが分かる。

私は http://ijime.tsht.net/2007/03/post_6.html のサイトから入っていき情報を得たが、たくさんあることに驚いた反面、PR 不足でせっかくの機関があまり活用されていないのでなかつたと思った。活用を促す方策も必要だと思った。

学校におけるいじめの抜本解決には教育改革が必要である。とりわけ教育行政システム・学校経営システム等の行政面からの改革が必要であり、教師改革（人材育成）面からの改革も必要である。人間を変える教師改革は資質向上策としてこれまで繰り返し実施されてきたはずだが成果は見えない。前の2つは制度の問題である。その制度面からの改革が出来れば自ずと資質向上が図れていくのでないかと思う。これまでは制度面からの改革より教師の面に改革の矛先が向けられてきていたようだ。今日の教育上の大きな課題は制度の歪みから来ていると言っても過言ではない。改革はまず教育行政のあり方からはじめなくてはならないと思う。

制度的なものにメスを入れずに、解決を教師や学校現場の問題のみに矮小化すれば、これまで問題が起きるたびに大議論してきたが、少しも解決せずト続いてきたように、今後も決して解決することはないはずだ。教育制度・システムの問題が前進すれば抜本的な解決に近づける。そうすることによって問題を積極的に発見・掘り起こしそれを組織的に解決するシステムづくりができていくのでないか。こういう機能する組織の中にいれば、エゴイストの塊みたに見える教師達も自ずと機能し、問題解決の一翼を担う事となる。教師を教師らしからぬようにしているのには教育行政のシステムに問

題があるからだとの趣旨を前述したが、これに気づき改革すれば、教師に関する問題もかなり解決・前進するはずだ。教育行政システム全体の改革はかなりの困難を伴うが、今回の事件で機運が盛り上がったいまこそ解決を考えなくてはならない好機である。この機を逃せば同じような痛ましい事件が今後も繰り返されることは必至だ。

現行の教育委員会制度は教育長（校長出身がほとんど）をトップとする専門的な事務方職員（教員の一時出向で、出世の有力なステップとなっている）で運営され、数名で構成される教育委員会には、そのチェック機能はほとんどなく、お飾りの事務方することに對してただ追認・承認を与えるだけのようだ。教育委員会（広義、ごくわずかの委員で構成）の本来の機能は教育行政に関すること全てが守備範囲であり、業務監査的な機能が当然あるはずだがそれが機能してない。本来有しているはずの機能を、現実的には事務局（狭義の教育委員会、多くの専門職員で構成）に名実ともに一任する形になっている。

第3者の機関の設置で教育行政に対してチェック機能を持たせることは法改正を伴いかなりの困難を伴うのかもしれない。教育委員会が本来有しているはずだと思われるチェック機能を發揮出来るような運営の改善（これも組織・機構の改善で法改正が必要なかもしれない、条例改正では難しいのだろうか）で問題解決に近づけるのでないかと思うが、現場にしかいなかった私にはこのところの意見には自信はない。

学校が機能しないことの元凶は人事管理（採用・昇進・登用・異動）にあるように思う。このところの改善に絞ればそんなに困難な改革ではないのではないか。でもこれらの問題は政官癒着に起因しているので、改革・改善ということは簡単でも実際上は難しいものとも思う。しかしこれをやらなくては前進できない。

現在の教育行政システムとりわけ人材登用・人事管理のあり方には、多くの問題をはらんでいる。保身の強いひとは他人の人権より自分の利益を守ろうとする傾向が強い。これがベースにあるからだと思うが今回のイジメ問題の対処の仕方は、真相解明することを避け、被害者救済より組織防衛というか関係者の保身のみが優先されたようだ。

その結果、文科行政に対する疑問や教育委員会の存続さえも疑問視されてくるような拮据を見せつつある。自己保身優先では真に自己の保身すらできない。組織防衛優先では組織防衛が危機に瀕することだってある。組織解体で出直し論さえ出かねない情勢だ。

組織が活性化しない。改革の機運がでない。マンネリ経営で生徒や国民のために機能しにくい・・・等、教育行政は多くの問題を抱えている。ここにメスをいれ改革を図ることは国の統治・行政機構を変えるのと同じレベルの困難さがあると思う。今回の表面化した事件はこれらの問題を考える契機としなければならない。

どんなに困難な問題であってもその原因が分析できれば解決の方途は見

つかれるものだ。現実の教育上の諸課題解決を図ろうとすれば多くの困難が伴うかもしれないが、その解決を図るためには政治がまず機能しなければならない。

12、その他（部分的にはすでに述べているけど）

（1）第三者（傍観者）の存在に注目したい。

精神的な攻撃にしろ、肉体的なものにしろ、直接関係する当事者以外に第三者（傍観者）の関わりも注目しなければならない。いじめに直接加わっていない第三者の関わりを分析するなかで、いじめの構造やその本質が見え、人権教育を進める上での多くのヒントが得られる。

第3者はいわば見学者である。いじめは隠れた場所よりクラス内とかで行われることがある。デモンストレーション効果を狙うものも多い。傍観者の中には、同調し、はやし立てたり、見張り番までするものがある。ターゲットが自分に来るのを恐れ保身の行動を取る。先生たちを信用していないから、先生などに報告することは極めて稀である。傍観者はいじめとは直接関係のない、物言わぬ第3者であり積極的に関わっているわけではないが、いじめに加担しているとも言える。いじめの問題は当事者だけでなくその集団全体の問題でもあるといえる。第三者の存在まで含めた全体での解決を目指さなくてはならない。30年ほど前、文化祭の出し物で私がHRTをしているクラスがいじめをテーマにした劇をやった。このときの脚本はこの傍観者にスポットを当てたものだった。この劇が27クラスの出し物の中で優秀賞を得た。

（2）抵抗勢力、つるみ行動もいじめと関係深い

偶発的な暴力やけんかと異なりイジメは計画的に行われる。多くの場合は攻撃する側がツルンデで多人数・集団で攻撃を仕掛ける。ツルムためには情報の共有が必要である。仕事に関することからプライバシー情報（私生活や思想信条にまで制限なく及ぶ）まで、とにかく攻撃するための互いの結束を固めるために情報は創作（捏造）され、あるいは加工され、仲間で共有されていく。こういうネガティブな情報で予断と偏見を作り上げ、差別していくことをする。ここではこのツルミ情報は重要な役割を担うことになる。その情報の真偽の確認は必要ではなく、明らかに誤り情報でも結束（ツルミ）のために共有することを目的としている。

大人社会においては、抵抗勢力（抵抗勢力についてはHPに記述）の存在もイジメと深い関係がある。自分の地位や存在価値、立場、利益を守ろうとするときに、都合の悪い個人やある勢力（集団）に対して抵抗したり攻撃したりする。それはまた、多くはやきもち・嫉妬の一つの現れであることも多い。邪悪なもの（良い方向、正しい方向へ行くのを嫌う）は、正しいもの・正義に対して嫉妬する。そういう人はツルンでイヤガラセ、妨害をする。

大人社会での精神的ないじめやイヤガラセの最も身近で典型的なものとして「無視」がある。仕事に非協力的であったり、大事なことを伝えなかった

り、教えなかったり、相談を拒否したりする。またその人の意見に反対したり、提案を通らなくする言動をしたりもする。サポートをせず足引っ張りなどの行動をグループで徒党を組み、つるんで行動をする。こういう人は仕事を組織的にするのでなく仲間内・友人関係でする傾向が強い。クラスや職場内の集団の中にこういういじめ集団と思しきものが存在するのである。学級担任や上司は人権の視点からこれらのグループの動きを注視し教育的な配慮で接しなければならない。

(3) いじめの発現・進展過程について（大人社会でのいじめも念頭に記述）

いじめについては第三者の関わり以外に、私はツルミ（連み）に注目したい。いじめは多くの場合複数の人間と特定の一人との関係である。私はいじめの発現・進展過程を次のように考えている。

- ①最初は1対1の関係で発生する。なんとなく・・・・・・・・・・が嫌いだ。という個人レベルの感情からスタートする。
- ②次に仲間作りが始まる。一人でのいじめではいじめをする根拠・合理性が弱く効果もあまり期待できないので、数を増やし多数派工作をする。ここでは仲間をつくるためにいじめのターゲットにする人の悪いイメージ作りの情報が交わされる。そしてその情報を共有していく。第三者にもその情報の一部が流され、いじめを合理化する。大人社会ではこの仲間作りはノコミュニケーションするなかで、子ども中では遊び（ゲームその他）をするなかで行われることが多い。
- ③次は仲間が無視、関わらないことをする。大人の場合は職場で対話を拒否したり、挨拶しない、その場から立ち去る。拒否の態度を表情に出す。仲間はずしの行動に出る。チームワークすることを意図的に避ける。仕事上のことを聞いても教えない、資料など仕事上に必要なものを渡さない、連絡、報告などしない。仕事など非協力的で孤立化を図る。
- ④次に直接的に攻撃に出る。子供の場合は手を出す行為に走るが大人の場合は口撃がメイン。複数の者のタイアップした言動で集団の中で孤立化を図る。
- ⑤次にいじめによって生じた孤立化現象およびそれに伴う対人失調の様子などで、周囲の人も気づいてくる。こういう表面に現れた現象を上司（クラス担任）にも報告していく。集団の内外にもいじめの正当性を認知させ、集団内でのその人の存在そのものの排除までも図ろうとする。このようにして悪が善を駆逐する現象が起きる。いじめは極に達し転校を余儀なくされたり、自殺まで追い込まれたりする。

このような進展過程のなかに巧妙な仕掛けが多く見られる。これらの仕掛けを見抜けるクラス担任や上司はごくわずかかもしれない。深刻な人権上の問題が教育の現場でも繰り広げられている。通常言われているいじめは今日解決しなければならない人権上の諸問題と共通している。

少し話が進みすぎているがついでにもう少し述べたい。各種の差別やいじめなどは人と人との関係を割く働きを持つが、これを解決するための人権教

育は人と人とを結びつける働きを持つ。学校教育はこの人権の教育を充実させていかななくてはならない。そのためには教育関係者自らが人権を基本に据える人権主義を持たなければならない。ところが現在の学校現場はこれに程遠いのが実情である。今回のイジメ事件で教育が危機に瀕していると感じた人は多かったと思うが、じつはこの教育関係者に人権主義が充分でないからでもあると言える。これが本意見書の基調の一つでもある。

14、最後に

私のホームページを紹介します。馬場弘教の四文字で検索しますとトップページが見つかり、現職中に書いた教育改革に関する数篇の論文が見つかります。その中の「宮崎県人材育成プランそれで人材育成できますか」、「人権・同和教育」は今回の事件に関連する論文で教育行政批判となっています。とくに校長批判の部分とメディアリテラシーについて書いてあるところを参考にさせていただきたい。現職中に教育委員会批判の論文をネット上に勤務校と実名で発信するのですから、やや批判のトーンを抑えた文章となっている。書いた当時は主張が過激にならないように配慮して書いたつもりであったが、退職後読みなおせば書き過ぎず書き足らずに調度良いくらいだったと思う。

15、参考資料(これ以降はネットで収集した記事をそのまま掲載)

●いじめについての正しい認識の徹底

「弱者をいじめることは人間として絶対に許されない。どのような社会にあっても、いじめは許されない、いじめる側が悪いという明快な一事を毅然とした態度で行き渡らせる。いじめは子どもの成長にとって必要な場合もあるという考えは認められない。また、いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為もいじめる行為と同様に許されない」という文部科学省の見解を、子供たちと保護者に徹底させることが必要です。

●学校の断固とした姿勢

いじめは決して許さないという断固とした姿勢を学校が示し、場合によっては停学などの厳しい措置をとることを知らせることが必要です。

「いじめられる側にも問題がある」として被害者を追い詰めるようなことは決してしてはなりません。●

加害者の指導

いじめの加害者は多くの場合、心や家庭に問題を抱えています。いじめ行為は加害者の心のSOSともいえます。学校と家庭が協力して加害者の抱える問題を解決しなければなりません。いじめの加害者を一方的に責めるだけでは、問題は解決しません。

●いじめ防止教育の実施

学校の対策は、いじめ早期発見に偏りがちです。もちろん早期発見して解決することは重要ですが、いじめの発生を防止するために、いじめ防止教育を全校的に行うことが必要です。いじめ防止教育によって、いじめを静観する傍観者から行動する傍観者に変えることが、最も有効ないじめ対策となります。

<いじめ防止教育の例>

- ・生徒が中心となった「いじめ対策委員会」活動
 - ・いじめ被害者の体験記を読ませる
 - ・いじめ問題を含めた人権教育
- ⇒いじめ対策の成功事例

●スクールカウンセラーの拡充

被害者がいじめを打ち明けやすい場所となるよう、またいじめ被害者と加害者の心の問題のケアを専門的に行うため、スクールカウンセラーを可能な限り常駐させることが必要です。文部科学省資料によるとスクールカウンセラーが派遣されている小・中学校は年々増加し、平成13年に4,000校を超えていますが、全国の公立小・中学校総数が3万3,000校にのぼることを考えれば充分ではありません。

●家庭教育・学校教育の見直し

いじめの加害者は、何らかの満たされない思いがあり、イライラ、むかつきを抱えている場合がほとんどです。いじめが発生した場合は、その原因を探り、家庭教育や学校教育を見直すことが必要です。

<いじめっ子の家庭5つの特徴> 尾木直樹著「いじめっ子 - その分析と克服法」より

- ・放任家庭
- ・子供に無関心な家庭
- ・体罰の多い、虐待家庭
- ・成績に追い立てられる、学歴信仰家庭
- ・夫婦不和家庭

<いじめっ子の特性> 尾木直樹著「いじめ - その発見と新しい克服法」より

- ・家庭で父母に体罰を受けたり、いじめのバツ等で教育されている子
- ・先生に体罰を受けたり(クラス・部活・授業)、きびしい管理と点検で追いつめられているクラスの子
- ・中学校では、小学校時代のいじめられっ子がいじめっ子に転化
- ・学力で大きく遅れている子、恥ずかしい思いを味わっている子
- ・自分に自信のない子、自分を好きになれないでコンプレックスをいただく子
- ・出番や輝きどころが保障されていない子

●CAP(子供への暴力防止)プログラム・ライフスキル教育などの導入

コミュニケーションの方法や、自分で暴力や様々な問題に対処する方法を子供に教えるプログラムを教育現場に導入することも、いじめ予防のために効果的です。イライラやむかつきの原因となるストレスに自分で対処したり、自分の意見を伝えたりする方法、暴力に対処する方法などを教えるものです。

⇒ CAPプログラム・ライフスキル教育について

日本の教師が身につけたい3つのスキル

1. (1)友だちづくり (Be friending) スキル

- 学級の中で生じるピア・プレッシャーの軽減
- 親和的な学級集団づくり
- 良質な人間関係形成の下地づくり

2. 傾聴 (Active Listening) スキル

- ワンダウン・ポジションの態度
- FELOR モデル

- 傾聴の 5 技法 「受容・繰り返し・明確化・支持・質問」 など

3. 対立解消 (Conflict Resolution) スキル

- 対立 (いじめ・もめごと) への積極的介入スキルの獲得

池島 (2005)

(1) 友だちづくり (Be friending) スキル

● グループ・エンカウンター

- 「心の触れ合い・出会い」体験を通じて、自分も他人も大切にする「個人」と「集団」の育成をめざす。1980 年代から教育界に広く浸透。学校では、構成的なエクササイズが一般的。

● ソーシャル・スキル・トレーニング

- 豊かな人間関係を形成し、維持するため に必要なスキルの体験的学習
- (コミュニケーションスキル, アサーションスキル, コーピングスキル) など

● ピア・サポートトレーニング

- 子どもの相互作用を積極的に利用して行われる体験演習は上記とかなり共通している。教育課程の中に導入しやすい。
- トレーニング後、子どもが自発的に立てた「個人 (グループ) プラン」に基づく活動を重視するため、自発的活動が期待できる。活動の中では、サポートされる側の利益だけでなく、むしろサポーター側に著しい成長が期待できる

(2) 傾聴 (Active Listening) スキル

● ワンダウン・ポジションの態度

- 「よく来てくれたね」「よく話してくれたね」

● FELOR モデル

1. Facing (顔を向ける)
2. eye-contact (目を合わせる)
3. Lean (体を傾ける)
4. Open (心を開く)
5. Relax (リラックスする)

傾聴の 5 技法 (國分 1999)

0. 受容
1. 繰り返し
2. 明確化
3. 支持
4. 質問

(3) 対立解消 (Conflict Resolution) スキル

ーいじめ・もめごと問題への積極的介入として 「メディエーション (調停)」を導入する